京都市ごみ減量推進会議・会報誌 2018. 春

こごみ日和75

特集：「もの」の価値って何だろう？
『捨てるなんてもったいない！』in 岡崎フリーマーケット

ごみ減会員さん訪問記「ごみ減の会員さんってどんな方？」：
京都生活協同組合さん

Hand in Hand：まっすぐに伸びる竹は、常に未来を向いている
～竹がもつ無限の可能性に注目～

なごみ日和：節分祭
KBS京都 アナウンサー　海平　和

人と物と。織りなす「もっぺん」物語 第4回：
ヘルシーな睡眠を求めれば、エコにたどり着く
田村ふとん店

地域活動レポート：“子ども食堂”を通して伝えたい
地域の絆とモノを大切にする心
～川岡東地域ごみ減量推進会議～

一緒に遊ぼう、仲良くなろう！
「もの」の見方が変わる、水野ワールドへようこそ！

ごみにまつわるこの数字なぁに？
31万トンから58万トン/年
答えはWebへ！
※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」をご覧ください。

「こごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。
最新号・バックナンバーもウェブで公開中！　http://kyoto-gomigen.jp/

手をとりあって ごみを減らそう！
京都市ごみ減量推進会議
京都　ごみ減　検索

特集

「もの」の価値って何だろう?

『捨てるなんてもったいない！』in 岡崎フリーマーケット

平成29年４月から、岡崎公園内で行われている「岡崎フリーマーケット※1」（以下、岡崎フリーマ）。同年11月12日（日）と12月10日（日）の２日間、この岡崎フリーマ内で『捨てるなんてもったいない！』をテーマに、ものを大切にする知恵や工夫がたくさん詰まった、体験型のイベントが行われました。

これまでにも京都市ごみ減量推進会議では、年に１～２回、フリーマーケットの開催に合わせて「もっぺん出張所※2」を設置。洋服や着物、かばんなど、愛着のある「もの」を長く使うための方法を提案してきました。今回はこうした取組に加え、フリーマの来場者が気軽に参加できるワークショップを多数開催。両日共にお天気にも恵まれ、イベントエリアは家族連れを中心に大いに盛り上がりました。

※１…前身は「市役所前フリーマ」。京都市役所の改修工事に伴い、岡崎公園内に場所を移して開催しています。
※２…当会議が運営するウェブサイト「もっぺん」に掲載されている、京都市内のお直し屋さんとコラボレーションし、フリーマの来場者から寄せられる修理・修繕に関する相談に応じています。お店の情報は、京のお直し屋さんとリユースショップ情報サイト「もっぺん」http://www.moppen-kyoto.com/ をご覧ください。

あれも、これも、全部いらなくなったもの？

多くのブースが並ぶ中、子どもがたくさん集まるコーナーがありました。ブースに置かれている大きな箱の中には、いろいろな長さや形の木材や、丸や四角の段ボールの切れ端、また発泡ポリエチレンの端材やレースやニットの端布、更には清水焼の陶器片など、普段私たちが目にすることが少ない素材も並んでいます。これらの素材は、全て製品をつくる際に出たもので、近隣の企業からこのイベントに合わせて提供いただきました。このような本来の目的では使われなくなったものを組み合わせ、誰もが楽しめる遊びの場を監修されたのは、水野哲雄先生※3（京都造形芸術大学名誉教授）。身近なものの面白い表情や形を引き出し、作る人のものの見方まで変えてしまう、ものづくりのスペシャリストです。「愉快なおもちゃ箱」と名付けられたこのコーナーには、ものの使い方や決まりは一つもありません。水野先生は、「日常的なこの場所で、皆さんに一歩踏み込んで、ものの面白さやものに興味を持つことの豊かさを伝えられたら」と話されます。その間も、４本の壊れた傘を手早く組み合わせ、「このイベントのテーマを、“見ただけで感じて”もらえるような、モニュメントを作っています」と、創作の手が休まることはありません。ちなみに、これらの傘は京都市営地下鉄・バスの忘れ物の傘の中から、壊れているものを譲ってもらったもの。水野先生の手に掛かると、使い込まれた傘が活き活きと見えてくるので不思議なものです。

オブジェを飾る水野哲雄先生

五感がはたらく、心がときめく

このコーナーが、一般的なワークショップと大きく異なる点は、「これを作りましょう」や「こうしましょう」とスタッフが教えるのではなく、参加者が自由に手や身体を動かし、「好きなものをどんどん作っていいよ」というスタイルだという点です。スタッフは、一人ひとりの創作意欲が高まるように見守る。何より水野先生が、わくわくしたり、ちょっと考えたり、表情を変えながら作品づくりに没頭されていて、その姿を見た人が「いいな！」と感じたことを、真似したり、ちょっと形を変えて工夫することで、面白さが波及していきます。実際に、スタッフが輪っか状の布を編み込んでオブジェを作っていると、小学生の女の子が器用に真似をし新しい方法を発見、それを見たスタッフが、「上手だね、面白いね！」とそのアイデアを共有するなど、創作の輪が自然に広がっていました。

小学生が自由に作った作品

いろいろな大きさの木材が積み上げられたコーナーでは、木材を組み合わせて文字を表現する小学生や、積んだり並べたりして熱心に遊ぶ幼児の姿も。年齢を聞くと１歳６カ月とのこと。小さい頃から触って、考えて、壊しながら「もの」や「ひと」と関わる経験は、とても尊いことだと感じました。子どもも大人も夢中になって作って、遊ぶ。誰も「ごみ」と遊んでいるなんて思いません。「不要なもの」＝「ごみ」の見方が変わる、そんな静かな興奮に包まれた空間でした。

発想を転換し、ものを活かす

色とりどりのアクセサリーやエコバッグが並ぶブースでは、制作者である京都精華大学の３回生にお話を伺いました。手作りのピアスやブローチには、洋服を作る際に出る端布やブライダル衣装の入れ替え時に廃棄される衣装のレースなどが使われており、使われなくなったものに新たな生命を吹き込む「クリエイティブ・リユース」を実践している素敵な作品でした。また、エコバッグは、デザインをプリントする際、かすれや汚れがあると商品として市場には出せませんが、その汚れを一つの個性と捉え、気に入って使ってくれる人にはお得な値段で販売するなど、こちらも「ごみ」にしない工夫がされていました。どの作品も一点ものなので、真剣な眼差しで色柄を選ぶ来場者の姿が印象的でした。

手から手へ、伝わる産地の魅力

来場者との会話も弾みます

もう一つ、若者のパワー（あふ）が溢れるブースがありました。京都府与謝野町から届いた「産地直送野菜等のはだか売り」コーナーです。新鮮な白菜や長ねぎ、大根、人参などの冬の味覚を、京都工芸繊維大学や同志社大学の学生たちが、「美味しいですよ！」「採れたてですよ！」と声を掛けながら販売していました。彼らは、「京都Ｘ（エックス）キャンプ」のメンバーで、京都府与謝郡与謝野町の特産品の魅力を伝えたり、地域の活性化を目指してイベントを企画運営するなど、幅広い活動を行っています。夏期休暇等に、実際に与謝野町で暮らし、学んでいる彼らだからこそ、伝えられる産地の魅力があります。当日販売された野菜は、前日に学生たちが与謝野町の畑で収穫したものです。真剣に、美味しい野菜を食べて欲しいと訴える姿は来場者の心を掴み、野菜は午前中でほぼ完売。今ではあまり目にすることのない「はだか売り」は売る側の学生には新鮮に、年配の方には、少し前まで日常的な景色だったと懐かしく感じられ、みんなが楽しめる場となりました。また、お客さんのほとんどがエコバックを持参されており、新聞紙に包まれた野菜を大事そうに持ち帰る姿は、とても幸せそうでした。

イベントエリアのスタッフとして、左京区地域ごみ減量推進会議のみなさんも参加されました。水野先生のワークショップのアイデアを今年２月に行われる左京区地域ごみ減主催の環境イベント『左京ふれあいecoフェスタ』でも活かそうと、参加者からの意見に耳を傾けたり、スタッフと熱心に意見交換をされていました。

今回、初めての開催となった『捨てるなんてもったいない！』in 岡崎フリーマーケット。企業や地域との連携を大切にしながら、第２弾、第３弾と続くように、みんなで育てていきたいですね。

※３…水野哲雄先生は、１年間様々な生活ごみや自然素材で遊びながら、作り、学び合う『地域ごみの資源化でクリエイティブ・リユースを！ー目指せゴミコロリ2015ー』（平成27年度、当会議助成事業）などを推進し、幼稚園やご自身のアトリエなどで、そのノウハウを伝える活動をされています。

松村香代子（平成29年12月10日取材）

「捨てるなんてもったいない！」ブース出店協力企業・団体（敬称略）

「もっぺん出張所」…アトリエ・メイ、カバンの明石屋・早川刃物店、福田匠庵、悠遊舎
「ふろしき包み体験」（ふろしき研究会）、「ハギレでハタキづくり」（京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会）、「おもちゃの病院」（京都SKYセンター）、「うちごみ相談所」（省エネ普及ネット・京都）、電気自動車の展示・給電（京都三菱自動車販売株式会社）、産地直送野菜等のはだか売り（応用芸術研究所、与謝野町 滝・金屋農業振興会）、「愉快なおもちゃ箱」（泉製紙株式会社、イズミヤ株式会社、大津板紙株式会社、岡本株式会社、京都市交通局、京都府紙料協同組合、清水焼団地協同組合、KTC（京都機械工具）、コニシ株式会社、左京区地域ごみ減量推進会議、株式会社中川パッケージ、有限会社山田木工所、株式会社ワコール）、未来のアート作家の作品展示（京都精華大学生他）、アトリエみ塾

「もったいない」食品が、「ありがとう」に変わる
～京都生協「フードドライブ」の取組～

京都生活協同組合
CSR 推進室　中垣 延広さん

近年、「食品ロス」という言葉を聞かない日はないのではないでしょうか？「食品ロス」とは、まだ食べられるのに捨てられている食べ物のことです。日本の「食品ロス」は年間約621万トン※1、これは１日に一人あたりお茶碗１杯分（約136g）の食べ物が毎日捨てられている計算になるのです。このうち、約半数の年間約282万トン※1は家庭から排出されています。今回は、「食品ロス」削減やごみ減量の取組に長年真摯に取り組んでおられる、京都生活協同組合CSR推進室の中垣延広さんにお話を伺いました。

※１…出典：環境省（平成26年度推計）

家庭に眠る食品を、必要とする方へ

2017年12月2日土曜日、京都生活協同組合（以下、京都生協）が運営するコープパリティの店舗を入ってすぐ、サービスカウンターの一角に食品の回収ボックスが設置され、その中には家庭から持ち込まれた食品が入っていました。この店舗では、同年10月から毎月第一土曜日「コープの日」に家庭で余っている食べ物を持ち寄っていただきフードバンク※2に寄付する「フードドライブ」活動のため、食品の回収ボックスを設置しています。

「フードドライブ」とは、家庭で余っている食べ物を持ち寄り、福祉施設やフードバンクなどに寄付する活動です。今回の京都生協の活動により集まった食品は、京都で活動を行うNPO法人セカンドハーベスト京都を通じて、子どもたちを支える団体や福祉施設などの食べ物を必要とする方々へ届けられます。開始からの４ヶ月（４回）で約90kgもの食品を寄付し、役立てていただいています。

※２…まだ食べられるのに、さまざまな理由で処分されてしまう食品を、食べ物に困っている施設や人へ届ける団体。

マイバッグ持参は20年以上

1964年に1,032名の組合員で創立された京都生協は、環境活動にいち早く取り組み、活動も盛んです。なかでも、店舗でのレジ袋削減の取組は、1983年にコープ下鴨で組合員の声からスタートした『レジ袋節約運動』までさかのぼり、1996年には全店舗での買い物袋持参運動（レジ袋有料化）を始められています。京都市の「しまつのこころ条例（京都市廃棄物の減量及び適正処理等に関する条例）」の施行により市内の食品スーパーでのレジ袋の有料化が2015年10月に開始されましたが、その約20年前から取り組まれていたことには驚きました。

2016年のマイバッグ持参率は93.4%、想定で年間1,214万枚ものレジ袋を削減したという計算になり、削減数は原油換算（1枚あたり10ミリリットルとして）で121キロリットル、ドラム缶（200リットル）で約607本に相当します。このデータを毎年公表していることも、取組が定着した理由の一つではないでしょうか。

知ってもらう、きっかけ作りから

子どもから大人までさまざまな世代に向けて環境に関する情報発信も続けられています。毎年、組合員向けに学習会や、夏休みには子ども向けのエコ教室を開催。今年はテーマを「食品ロス」として、みんなで学びました。

8月には子どもエコ教室を開催。ゲームを通じて食品ロスを学ぶことができる「もったいない鬼ごっこ」を実施し33名の小学生と保護者27名が参加しました。生産現場からスーパー、食卓のそれぞれのプロセスで発生する「食品ロス」について、どのようなことが問題になっているかを、遊びを通じてわかりやすく学んでもらいました。参加者からは、「食べ物の1/8が捨てられているんだとはじめて知りました。ごはんを残さずに食べたいと思います。賞味期限を気にして買ったり食べたりしたいです。」「はじめて食品ロスを知りました。これからは、きらいな食べ物にも挑戦しようと思いました。」などの声があがり、小学生のみなさんもできることから取り組んでいただいています。

大人向けには、11月に京都市出身の家庭料理研究家　奥薗（おくぞの）壽子（としこ）さんによる講演会「食材ムダなし！食べきり習慣のススメ。手間なし保存＆使い回しも伝授します！」を実施しました。募集開始後すぐに予約で満席となる盛況ぶりで、「食品ロス」の話題から、つい余らせがちな大根や白菜、キャベツなどの身近な食材をムダにせず、おいしく食べるヒントまでわかりやすく解説していただきました。参加者はしきりにうなずいたり、爆笑が起こるなどあっという間の２時間の講演会となり、参加者の今後の行動にも期待が高まります。

ごみ減量に取り組み、コスト削減に

もちろん、店舗でのごみ減量の活動も積極的に行われています。紙パックや食品トレー、ペットボトルや卵パックなどリサイクルされる容器包装などの回収ボックスを各店舗に設置、トイレットペーパーや食品トレーなどに再生利用されています。回収量や回収率の実績も毎年発表され、組合員とともに環境活動として、取り組まれています。また、商品供給の管理を適切に行うことは、廃棄物の削減、さらにはコスト削減にも役立つため、発生抑制のための取組も日常的に進めています。それでも発生してしまった食品廃棄物は再生利用事業者により飼料化やバイオガス発電としてリサイクル。廃食油はバイオディーゼル燃料（BDF）に加工され、発生抑制から再資源化まで、より環境負荷の少ない事業活動に前向きに取り組まれています。

一歩踏み出し、その先へ

これまでにもさまざまな環境活動を続けている京都生協ですが、実は「フードドライブ」の開始までには、社内調整に数ヶ月を要することとなりました。「食品ロス」をテーマに学習会などを企画する中で、京都生協が取り組めることとして、始めたいという役員の想いから検討が始まりました。

従来店舗では、買い物に来られた方に食品などを提供していますが、逆に家庭から食品を提供していただくことは初めての取組。回収できないもの（生ものや冷凍食品など）が集まる可能性があるのではないか、店舗で働く従業員の負担になるのではないかなど、心配の声が多くあがりました。また、集まった食品を第三者に渡したときに、万が一食品事故が起こったら誰が責任を持つのかという懸念もありました。

何度も話し合いを重ねた結果、何か問題が起きた時にすぐ対応できるようにと、本部から一番近い店舗から試験的にはじめることが決まりました。実施の１ヶ月ほど前から店頭でチラシを配り声かけを開始。興味深く見ていただく方が多数見受けられ、反応は上々。店内放送や、ポスター、店舗を登録していただいている組合員向けのメールマガジンの配信などで周知活動を行いました。「開始までの社内調整が大変でしたが、様々な食品を持ってきていただきました。チラシの店頭配布時から、多くの方に興味を持っていただき、質問に来られるお客さんもいました。実施できて本当によかったです。」と中垣さん。当初心配されていた生ものや冷凍食品などを持ち込まれることもなく、スムーズなスタートが切れました。

まずは１店舗のみで試験運用の現在、2月からは、店舗数を増やしてフードドライブに取り組む計画も行われているとのことでした。眠っていた食材が社会貢献に繋がり、家庭からのごみ減量にもつながる「フードドライブ」。京都生協の、今後の展開が楽しみです。

前田綾（平成29年12月2日取材）

京都生活協同組合本部
住所：京都市南区吉祥院石原上川原町１-２　TEL：075-672-6304　ホームページ：http://www.kyoto.coop/index.html

今後の京都生協実施予定のフードドライブ情報

京都生活協同組合　コープパリティ
日時：2018年５月５日（土），６月２日（土）９時30分～21時00分
　　コープの日（６月２日以降は毎月第１土曜日のコープの日に実施）
会場：京都生活協同組合　コープパリティ　サービスカウンター
　　京都市右京区西京極東池田町 42

京都生活協同組合　コープ醍醐石田
日時：2018年５月５日（土），６月２日（土）９時～21時00分
　　コープの日（６月２日以降は毎月第１土曜日のコープの日に実施）
会場：京都生活協同組合　コープ醍醐石田　サービスカウンター
　　京都市伏見区醍醐新開 11-13

Hand in Hand

まっすぐに伸びる竹は、常に未来を向いている
～竹がもつ無限の可能性に注目～

京都のまちを歩いていると、ときどき美しい竹林を目にすることがあります。この竹林に癒された経験のある人はきっと多いはず。竹はこのような観賞用だけではなく、製品として私たちの生活を支えてきました。しかし、今、生活の中でどれだけ竹製品があるでしょうか。今回の取材では、この「竹」に注目し、昭和34年から竹細工製品を手掛ける東洋竹工株式会社代表の大塚正洋さんに、これまでの竹とこれからの竹についてお話を伺いました。

生活の中にあった竹製品はどこへいった？

ザルや箸など、かつて生活の中にはたくさんの竹製品がありました。しかし、昭和30年ごろからプラスチック製品が出回るようになると、竹製品を見ることはほとんどなくなってしまいました。「プラスチックはカラフルだし、曲がらないからね」と大塚さん。以前、デパートで売られていた竹箸が曲がってきてクレームが出たというエピソードも紹介していただきました。「自然のものだからね。ある程度は曲がりますよ。」となんだか楽しそう！？にお話しをされていました。そこには、今までにない竹の可能性を見据えた大塚さんの「秘めた思い」も感じられました。

東洋竹工株式会社 代表
向日市観光協会 会長 大塚正洋さん

これまでの竹とこれからの竹

東洋竹工さんの展示室には、マネキンや精巧にできた電車模型など「こんなものまで竹で作れるの？」といった超絶技巧の竹製品が多数展示されていました。しかし、大塚さんは、「竹製品でどこまでできるか」だけではなく、「竹がどこまでライフラインに貢献できるか」に注目されていました。「例えば、竹の粉を使って生ごみを分解したり、災害時用のトイレに応用できたりもする。竹で発電する試みだってあるんです。」「昔ながらの竹製品に囲まれた生活に戻るのは難しいでしょう。むしろ、竹がもっと生活の中に自然に入り込むようになればいいね。」とにっこり。

かぐや姫もエコ活動？
―「竹の径・かぐやの夕べ」

ところで、竹は1日で1m以上も伸びることがある程、とにかく成長スピードが速いことで有名。竹林を放置しておくと、無尽蔵に竹が成長し、生態系や安全面で問題も出てきます。このため、竹林整備として間伐するのですが、実際に竹を製品原料として利用するのは半分。残りの半分は廃棄されてしまうのが現状です。大塚さんが会長を務める向日市観光協会ではこの問題に着目し、本来廃棄される竹を利用したイベント「竹の径・かぐやの夕べ」を15年前から実施しています。竹筒を竹林道に並べ、中の水ロウソクに火を灯し、秋の夜を楽しむという何とも優雅なイベント。「単に廃棄するのではなく、少しでも竹に触れていただき、楽しんでいただければ」と。

竹には世の中を幸せにできる可能性がまだまだある！まっすぐに伸びる竹と、この竹と共に60年を歩んできた東洋竹工さんは、まさに未来を向いているように思いました。

高野拓樹（平成30年２月13日取材）

なごみ日和

KBS 京都 アナウンサー
海平（うみひら） 和（なごみ）

●● 第17回 「節分祭」 ●●

突然ですが、私、今年前厄なんです。だからという訳ではなく毎年楽しみにしているのですが、今年も左京区にある吉田神社の節分祭に行ってきました。吉田神社の節分祭は節分当日を中心とした前後３日間にわたって行われ、毎年全国から数十万人の参拝者が訪れます。節分前夜には悪鬼を追い払う「追儺式（ついなしき）」そして当日夜11時からは「火炉祭（かろさい）」が。この２つは有名ですが、節分当日の夕方、前日に追い払われ改心した優しい鬼たちが現れるのをご存知でしょうか？その鬼たちは福を授けにやってきます。私は今年、「笑う門には福来る」と大笑いしながら練り歩く、その福鬼たちに会うことができ、厄払いになったなぁとうれしい気持ちになりました。

そしてその後行われるのが「火炉祭」。古い神札やお守を集め焚き上げる、室町時代から続いているとされる伝統的な神事です。直径、高さ共に５メートルの大きな火炉からあがる炎は年の厄をはらうともされています。

今年も参拝者が見守る中、大きな火柱があがりましたが、2015年と16年の２年間は大規模な焚き上げは中止となり、古札に直接点火せず、古札の神を御幣（ごへい）に集める神事をした後、その御幣を燃やすという形に変わったことが話題になりました。それだけのものを燃やすと膨大な量の焼却灰が出てしまい、環境への配慮を考えると費用も莫大にかかってしまうという処理問題が理由でした。それでも愛されてきたこの伝統行事の復活を望む声は多く、去年から焼却灰を産業廃棄物として処分することで復活。環境への配慮のため、紙袋などは回収されなくなり、それだけでもかなりの量が減ったようです。

室町時代から続いてきた「火炉祭」、京都にはそのような長く続いている伝統行事がたくさんあります。受け継ぎ、守っていくために、私たちは様々な努力、思いをもって進めていくことが必要なんですね。人にも思いやり、環境にも思いやり。

海平　和：京都市出身、2010 年 KBS 京都入社。テレビ「京スポ」「news フェイス」、ラジオ「栢木寛照熱血説法こころのラジオ」などに出演中。

人と物と。織りなす「もっぺん」物語 第4回

ヘルシーな睡眠を求めれば、エコにたどり着く　田村ふとん店

近頃、目覚めがすっきりしない…。そう、感じているなら、固くなったり、弾力がなくなっていないか、ふとんをチェック。木綿わたのふとんなら、打ち直しという、ふとん屋さんの多くが、昔から手がけているリフォーム方法で新品同様によみがえる。吸湿性や保温性が再生されるばかりか、ダニやホコリも除去し、フカフカ状態に。

近年、普及している羽毛ふとんもリフォームでき、洗ったり、汚れを取るとふんわり感がもどる。

量販店などが多く扱うポリエステル製のふとんは、吸湿性が低く蒸れやすい上、打ち直しもできないため、数年経つとへたってしまう。不要になると、大型ごみとして、そのまま廃棄されることが多いと聞く。人は睡眠中にコップ１杯程の汗をかくとされる。木綿のふとんは、中空という組織を持ち、睡眠中の汗を程よくコントロールしてくれ、寝床内温度を適切に保持する。つまり、快適な睡眠がかなう訳だ。

健康な睡眠のあり方を紹介するボードを手にする田村ふとん店　店主

今回訪ねた『田村ふとん店』慶応３年西陣に店を構えたこの店は、ふとんの打ち直しをどれだけして来たのだろう。そして今、店主の成史さんは睡眠改善インストラクター、さらに寝具製作技能士の資格を取得し、健康な眠りのアドバイスに対応している。もちろん木綿わたの打ち直し、羽毛ふとんのリフォームはお手のもの。健康もエコも叶える、ふとん。田村ふとん店で教わった。

※参考として、京都市の大型ごみの内、ふとん・カーペット類は7.8万件（大型ごみ全体の約20%）（平成29年３月末現在京都市調べ）

▶ 田村ふとん店　京都市上京区千本通り上長者町下ル　☎075-451-2165

森田知都子（平成30年１月23日取材）

“子ども食堂”を通して伝えたい　地域の絆とモノを大切にする心

桂離宮から桂川街道を南へ約1㎞、西京区の南東に位置する川岡東学区。1982年に川岡学区から分離して誕生した比較的新しい学区で、子育て世帯の多いエリアです。今回は、地域のごみ減量活動と同時に、子どもたちの“居場所づくり”にも力を注ぐ川岡東地域ごみ減量推進会議（以下、川岡東ごみ減）の取組を紹介します。

エコまちステーションと協力し、ごみ出しマナー向上啓発

川岡東ごみ減会長の関谷一男さん

川岡東ごみ減は、2014年に設立以来、公園や各町内における定期的な清掃をはじめ、使用済てんぷら油、古紙類のコミュニティ回収など、積極的にごみ減量に取り組んでいます。「ほとんどの人がルールを守ってごみを出していますが、中にはルールを守れない人がいて、収集時間外に出されたごみがカラスに荒らされて困ってるんです」。そう話すのは、川岡東ごみ減の会長を務める関谷一男さん。その対策として、カラス除けネットでごみを覆ったり、収集ルール周知のチラシ配布や啓発のミニポスターを収集場所に掲示するなど、西京エコまちステーションと連携してマナー向上の意識啓発に努めています。

「食」を通した子どもの居場所づくり

この日訪ねたのは、「ひまわり食堂」が開催される川岡東自治会館。ひまわり食堂は、「子どもだけで来ても食事ができ、安心して過ごせる場所」を、と川岡東児童館の職員だった木村友香理さんが2017年4月に立ち上げました。学童保育で関わる子どもたちの「お母さん、夜まで帰ってこない」「一人でご飯食べてる」という声がきっかけだったといいます。「子どもは仕事で大変な親を気遣う気持ちがあって、声高に『一人で寂しい』とは言わないんです。だからこそ、そういう子どもたちの寂しさを汲み取って、家のほかにホッとできる“子どもの居場所”を作ろうと思いました」と木村さんは言います。その想いに賛同した人が集まって、子どもと地域をつなげる居場所「コミュニティ・スペースsacula」がスタートしました。

温かい手作りご飯をみんなでいただきます

子どもたちと遊ぶ木村友香理さん

捨てられていたかもしれない食品が大活躍

おてらおやつクラブから届いた“おさがり”の品々

ひまわり食堂は、毎月第1日曜日に開催され、saculaのスタッフのほか、関谷会長や地域のボランティアさんが応援のため参加しています。「お手伝いに来てくださる方々はもちろんのこと、地域の人からの寄付金やいろんな形で寄せられる食材や品物に支えられている」といいます。子どもたちに提供する料理には、地元の農家から提供いただいた野菜をはじめ、『セカンドハーベスト京都』※1や『おてらおやつクラブ』※2から届けられる食品が使われています。この日のメニューはパスタとサラダ。ソースはミートソースとホワイトソース2種類の味が楽しめて子どもたちも大喜び。「メニューは子どもたちの希望で決まることが多く、手巻き寿司やたこ焼きなど、子どもが一緒に調理に参加できるメニューが人気です」と木村さん。食後は、おしゃべりしたり、おもちゃで遊んだり、それぞれが好きなことをして過ごします。ここでも地域の人から提供された本やおもちゃが大活躍です。

エコ活動や多世代交流の場として

食事の配膳を手伝う子どもたち

「子どもが安心して過ごせる場所を」との想いからスタートした子ども食堂。しかし、そこは子どもだけでなく、地域のさまざまな人や学生ボランティアが集まる多世代交流の場となっています。さらに、食品ロスになっていたかもしれない食べ物や、要らなくなったおもちゃなどの有効利用の場にも。

ひまわり食堂で使われている食器は、自治会館の備品であるリユース食器。また、施設内のお手洗いでは、めぐレットペーパー※3が使われています。こうした小さなことから環境への取組を推進し、それが地域の人々の環境意識の向上に結び付いてほしいという関谷会長の想いが感じられます。「子どもたちが大人になった時に、帰ってきたいと思ってもらえるような住みやすい街、地域のあたたかさが感じられる街にしていきたいですね」と関谷会長。この取組が“子どもの居場所”としてだけでなく、子どもが社会とのつながりを深める場として、ますます地域に根差していくことを期待します。

藤原幸子（平成29年12月3日取材）

※1　安全に食べられるのに廃棄される食品を集め、必要とする人々や団体に提供する活動を行っている団体
※2　お寺にお供えされたお菓子や果物などを“おさがり”としておすそ分けする活動
※3　京都市の子どもたちが地球の環境を守るため、学校給食で飲み終えた牛乳パックを再生するという取組から生まれたトイレットペーパー

ごみ日和 75 京都市ごみ減量推進会議・会報誌 2018. 春
編集・発行／京都市ごみ減量推進会議　普及啓発実行委員会　〒612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町13 京エコロジーセンター活動支援室内
TEL:075-647-3444／FAX:075-641-2971　E-mail: gomigen@kyoto-gomigen.jp　URL: http://kyoto-gomigen.jp/

ごみ減　検索　で検索できます
植物油インキで印刷しています。VEGETABLE OIL INK
この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ！